

一人一人が尊重され、 心豊かな児童の育成をめざす人権教育の中の道徳科 ～自ら学び、豊かに表現できる道徳科の授業づくり～

提案者 さくら市立喜連川小学校 教諭

石塚久恭

1 はじめに

本校は、平成22年度に5つの小学校（喜連川小・鶯宿小・河戸小・金鹿小・穂積小）が統合し、新喜連川小学校としてスタートしてから12年目を迎える新しい学校である。令和2年度に文部科学省の人権教育研究校に指定され、「一人一人が尊重され、心豊かな児童の育成をめざす人権教育」をテーマに、道徳科を核とした人権教育に取り組んできた。今年度は、栃木県の人権教育研究校の指定を受けて、さらに研究を進めている。本提案では、これまでの本校の人権教育の研究をとおした道徳科の実践から、成果と今後の課題を明らかにしたいと考える。

2 提案内容

(1) 「考え、議論する道徳科」の授業の実践

本校では、道徳科の授業の研究を進めてきた。中でも、「考え、議論する道徳科」の授業の実践をすることで、互いの考えを尊重する態度を育成するとともに、友達の多様な考えに触れることで、自らの考えを深め広げていくこととした。そのためには、教師の授業力の向上とこれまでの本校の教育実践を生かした全教育活動を通じた取り組みが必要であると考え、研究に取り組んだ。

① 道徳師範授業の実施

本校では、令和元年度から白鷗大学の中山和彦先生による師範授業を実施している。これにより、新学習指導要領に沿った道徳科の授業について、授業という形で具体的に学ぶことができた。若手教員が道徳科の授業の基礎を学ぶ機会になるとともに、中堅教員にとっても、これまでの道徳の授業からの変化や共通点を具体的に学ぶ場ともなっている。

② 中心発問を起点とした授業づくり

道徳科の研究授業では、児童がねらいに迫り、道徳的価値についての考えを深め広げていくために、どのように授業を進めていくかを検討した。6年「大空に飛び立つ鳥」の指導案検討では、ねらいに迫るために中心発問の検討に時間をかけた。そして、中心発問で児童がねらいに迫ることができるように、前後の基本発問を組み立てていった。中心発問を検討する際に、児童に考えさせ議論させるには、教科書を読んでも分からない発問にする必要性に改めて気づいた。さらに、補助発問として、価値理解だけでなく人間理解につながる発問を用意し、中心発問での学びを広げるようにした。

(2) 「聞く・話す力」の育成と「書く力」の育成

本校では、令和元年度の学校課題から、国語科における「構成の検討」「考えの形成」「記述」

「共有」に重点を置き、「書く」活動に焦点を当て、授業の研究を進めてきた。これらの成果を道徳科の学習でも取り入れて、更に実践を進めた。

① 「喜小の聞くちゃん」「喜小の話ちゃん」「青ペンくん」

自分の考えを書いた後、相互の思いや考えを伝え合う場を設定し、少人数で発表し合うことにより抵抗感を少なくするなど、自信を付けられるようにした。その成果として、授業等で自分の考えを文章にまとめて書くことに対する抵抗感が低くなってきた。また、自分の考えを伝え合う活動で、自分の考えがどのように変化したのかを青色で書き込ませる「青ペンくん」を実施することにより、児童同士の学び合いが深まった。

② ペア・グループ学習による伝え合いや学び合いの場の設定

道徳的価値について多様な意見に触れることで、自らの考えを深め広げていくために、ペア・グループ学習による伝え合いや学び合いの場を設定した。

③ 書く活動の充実

自分の考えを深め広げるため、じっくり自分と向き合って書く活動を設定した。効果がみられた反面、書く活動が数回に及ぶと、道徳的価値に迫る話し合いの時間が取れなくなることから、どこで何のために書かせるかを教師が明確に意識して書く活動を設定する必要がある。

(3) カリキュラムマネジメントを効果的に活用した道徳実践力の育成

心豊かな児童の育成は、道徳科の授業だけでは実現できない。全教育活動で効果的に連携して行う必要がある。そこで、カリキュラムマネジメントを生かして様々な教育活動で道徳実践力の育成に取り組んだ。

① あいさつ運動の実施

自他を尊重する第一歩はあいさつと考え、道徳科の授業であいさつの大切さについて考えるとともに、日々の児童指導やあいさつ運動、さくら市青少年育成センターのあいさつ巡回運動であいさつ指導をするなど、あいさつをとおして自他を尊重する態度を育成するために、「教える」と「育てる」のバランスを取りながら指導に取り組んだ。6年生では、あいさつをもっと盛り上げようと学級で話し合い、率先してあいさつ運動を企画し、休み時間に実施する児童がみられた。

② 友だちの考えを認め合える学級の雰囲気作り・認め合い称賛し合う場の設定

全学級で、帰りの会に「今日のきりりちゃん」を発表している。友達のよさを見つけ伝え合うことで、自他を尊重する資質や能力を育成している。また、クラスごとに人権コーナーを設置し、「一人一人がすばらしい〇年〇組」に感謝したい人へのメッセージを掲示することで、自他を尊重する資質や能力の育成に取り組んだ。学級だけでなく学校全体を対象を広げて実施した。これらの活動をとおして、自己有用感に裏付けられた自尊感情の育成に取り組んだ。

(4) ミドルリーダーとしての道徳教育推進教師

本校では、道徳教育推進教師が重要な役割を果たしている。年度初めには、全校体制で道徳科の授業を実施するために、道徳科での約束事を設定し周知した。また、各学級に道徳コーナーを設置し、どの学級でも授業を振り返られるようにしている。更に、年5回道徳通信を教師向けに発行し、道徳科の情報提供や周知徹底に取り組んだ。一方で、地域や家庭との連携も重要なことから、年に2回保護者向けの道徳だよりを発行し、本校の道徳教育について情報を提供している。これらの様々な取り組みがより効果的に実施されるように、道徳教育推進教師がミ

ドルリーダーとして活躍しており、本校の道徳教育に欠かせない存在となっている。

3 成果と今後の課題

(1) 成 果

校長がリーダーシップを発揮し、道徳教育推進教師がミドルリーダーとして全校体制で道徳教育を推進する雰囲気を作ったことで、道徳科の授業の質の向上につながった。また、本校のこれまでの教育実践や学校課題の成果という財産を生かし、カリキュラムマネジメントを生かして心豊かな児童の育成に取り組むことで、児童の変容が見られつつある。

(2) 課 題

ねらいに迫るための中心発問や、中心発問を軸とした基本発問の設定など、授業の構成に工夫が必要である。また、児童が自分事として考えることができる発問の在り方を工夫する必要がある。更に「考え、議論する道徳」のように、道徳科の特性を生かした新たな授業の研究や実践を更に進める必要がある。一方で、道徳の時間の授業で育み蓄積してきたノウハウを、道徳科の授業に生かし、ベテランのもつ道徳の授業のノウハウを、若い世代の教師に受け継いでいくことが重要である。